昭和三十二年七月二十五日
諫早大水害の記録

市民の生命・財産をしっかりと守ります。

あの日から50年が経ちました。もう50年が経ったのか。というのが正直な気持ちです。

あの日、突如襲ってきたかつて経験したことのない大水害。

私も大学の夏休み、帰省していた八坂町の実家でこの未曾有の大水害に直面しました。

夕方から雨がひどくなり停電したので早めに寝ていた私たちを父と母があわてて起こしにきました。気がつくと家の中に水が凄い勢いで浸水してきていたのです。私たちは2階へ避難しましたが、水かさはどんどん上がり、最後は1階の天井付近まできていました。翌朝外を見ると、流された家々や変わり果てたまちを目の当たりにし、大きなショックを受けたのを今でも鮮明に覚えています。がれきの山々や運ばれる遺体、復旧作業にあたる自衛隊。当時のことは決して忘れることができません。そして当時、最も印象に残っているのが、野村市長の姿です。講堂で、「市民に握り飯や水はいったろうか」と自らが指揮をとり、災害復旧に全力であたる姿が今でも目に焼きついています。

災害はいつ何時起こるかわかりません。私の市長としての基本は安全・安心なまちづくりです。そして最大の責務は、市民の生命・財産を守るということです。それにはまず防災。現代の地球温暖化や異常気象にもしっかり備えていかなければいけません。

50年が経った今、あの日のことを風化させることなく、今一度この歴史を再認識し、災害に強いまちづくりをさらに進めていきます。

諫早大水害洪水水位標

この石標は、諫早大水害から50年を経過し、次第に消えゆく水害の痕跡を刻み、自然災害の脅威を後世に伝えることを目的に設置しました。

設置場所は、周辺に当時の建物が現存し、地形が大きく変化していない八坂町(通称・魚棚通り)です。アーケードからも近く、諫早大水害時の水位が実感できます。

諫早市長
吉次邦夫